





# 暮らしナビ

## お金の教育子供のうちに

幼児期からのお金教育が注目を集めている。インターネット経由の商品購入やスマホを使った決済が広がり、見えないお金の新しい付き合い方が必要になっていく。2022年に18歳に成人年齢が引き下げられるのを前に、早くからお金をめぐるトラブルを防ぐための教育を求める声もある。お金について最初に学ぶ、幼稚園や小学校低学年の子供を対象にした現場を訪ねた。

昨年12月中旬、埼玉県川口市で小学校低学年の子供と保護者を対象にマネー講座が開かれた。参加した津谷宏紀さん(38)は小1男児の父親。「キャッシュレス化が進むなか、子供が知らず知らずお金を使うのを避けるためのヒントを学びに来た」と語る。子供たちは、小遣い帳をつけながらお金をやりとりするゲームなどに参加していた。

保護者にとって、お金をどう教えるかは悩ましいテーマだ。小3女兒の父親である高柳謙さん(45)は「親がダメと言った物を『お年玉を使って買っ』と言っ娘に、どう対応するか迷っている」と話す。小1男児の母、池上美香さん(41)は「小遣いの使い方や小遣い帳について知りたい」と言う。

ファイナンシャルプランナーのいちのせかつみ氏は「教育効果を考えれば、お金の教育は幼稚園や小学校低学年から始めるべきだ」と強調する。中高生だと「金銭感

覚がある程度確立しているため、改めるのはなかなか難しい」。

日本銀行に事務局を置く金融広報中央委員会は、お金の付き合い方や金融・経済の基礎知識を学ぶ「金融教育」を推進している。幼稚園の段階で教える内容として「自分のものと他人のものを区別する」「約束を守る」「労働の価値に気付く」といった例を挙げている。

幼稚園や保育園では「買い物ごっこ」がお金教育の定番だが、全く異なるアプローチで取り組んでいるのが、甲府市の認定こども園すみよし愛児園だ。月1回の「石窯デー」では、園庭の石窯で火をおこしたり、具を並べたり、完成したピザパンを年少クラスの子供に配ったり、各自が役割を選んで活動する。

矢巻行祥統括園長は「自分で判断する力と他人と信頼関係を築く力、感謝されて喜びを感じる力を

# 大事なお小遣い どう使う？



園児が取り組むピザパン作りもお金の教育の一環(2018年11月、甲府市)

## 日常生活に学習機会を

幼少期のお金の教育5カ条	
1	大人がお金の使い方を見せる
2	使えるお金の限度があることを教える
3	子供がお金の使い方を考えて自分で決められるようにする
4	小遣い帳などに記録し、使い方を随時振り返る
5	将来に目を向け、貯金にも取り組む
※いちのせかつみ、住田裕子、あんびるえつこ、西村隆男各氏への取材などからまとめた	

「子供の教育に詳しい横濱国立大学の西村隆男名誉教授は「信頼を得たり、チームで協力して判断したりする経験は、お金が不可欠な商取引や将来の起業などの学びにつながる」と指摘する。

お金を使う消費者の立場に加え、こうした体験を通じて商品やサービスを提供する側について知るのもお金の教育の一つ。弁護士住田裕子氏は「近年は家業のある家庭が減り、多くの子供は生産者の立場を知らないまま社会に出るようになっていく」と話す。小学生になると、お金のやりとりを介した学びの段階に入る。最近の子供は少額のお金の経験を十分に積まないうまま、ネットやス

マホで手軽に物を買える環境に触れる。

山梨県上野原市の秋山小学校。小2の児童らは近くのよろず屋に300円を持って買い物に出かけた。佐藤恵里教諭は11月下旬の授業で「もう一度買い物するとしたら、どうしますか」と尋ねた。

中島大地君はガムを10個購入。「今度は家族のものや、消しゴムも買いたい」と答えた。大地君の母親、孝子さん(47)は、「近所に店が少なく、普段は車でショッピングセンターに行くので、子供が一人で買い物をする経験がなかった」と話す。

「子供のお金教育を考える会」代表のあんびるえつこ氏は「キャッシュレス化が進むと、お金の使ったという実感が希薄になる。買った物を振り返って、評価したり反省したりすることが今まで以上に重要になる」と指摘する。

日常生活では、実際にお金を使う場面を学びにつなげるとよい。足し算ができる子供に、買い物中に300円以内で好きなお菓子を選ばせることで「使えるお金には上限がある、時には欲しい気持ちを抑えるのが必要、といったことが学べる」(あんびる氏)。幼児なら「お菓子を1つ選ぶことが、判断する練習になる」。親子で取り組んでみたい。(相川浩之)

## 悩み・相談多様に

「親のスマホを使ってゲームで遊ぶうちに、有料アイテムを次々買っていた」「子供が通学用の交通系ICカードで買い物するようになり、残高が減る感覚を持てないのではないかと心配」——キャッシュレス社会が進むなか、専門家の元には子供とお金にまつわる新しい種類の悩みや相談が寄せられている。

「親のスマホを使ってゲームで遊ぶうちに、有料アイテムを次々買っていた」「子供が通学用の交通系ICカードで買い物するようになり、残高が減る感覚を持てないのではないかと心配」——キャッシュレス社会が進むなか、専門家の元には子供とお金にまつわる新しい種類の悩みや相談が寄せられている。

最初、縦糸と横糸の構造に忠実な織り方をしていたが、しだいに極太の糸など横糸にイレギュラーな素材を混ぜる実験を始めた。「ルネサンス的なシステムをくずしてゆきぎょうとするのがバロックではないか」

研究会の最後は、意外なことに組織論の話になった。ルネサンスの絵画は、登場人物の1人が抜けても、他の人物たちは変わらずそこにいそうに見える。

一方バロックの絵画では、1人が抜けたら他の人物たちが助けに入るか、それとも全体がくずれてしまつかだるう。持ち場が固定されているルネサンス的な組織は安定しているが、本常に各自の能力が生きているのは、全員が遊動的に振る舞う用意があるバロック的組織ではないか。美術の様式から出発して働き方改革の話題にたどり着く、楽しい会となった。(美学者)

## 育む

「ぼくの研」を立ち上げた。「ぼく」は、「おぼろげぼろ」とか「昭和っぽさ」とか言うときの「ぼろ」のこと。気軽に使っていいけれど、真面目に考えると、これがけっこう奥深い。

たとえば筆者の息子は、ものすごく電車が好きな子供だった。N700系がどうなの、ゆふいんの森がすごいのだ、大人顔負けの鉄道マメ知識を一日中披露していたのだが、それだけでは飽き足らず、あらゆるものに「電車っぽさ」を見つけてはそれをおもちゃにしていた。たとえば手すりに引っ掛けてある傘。彼にとってそれは「モノレール」であり、見た目が全然似ていなくても、「棒状のものの上を何かがスライドしていく状況」は、すべて彼にとっては「モノレールっぽいもの」だった。人が世界をどうとらえるときの心

## ぼくの研

とつこの認識の枠組み、とても言葉に言いにくいだろうか。「ぼく」は、その人なりに捉えたあるものの本質を、別の何かにも見いだす回路である。

1回目のぼくの研のテーマに選んだのは、「バロックっぽく」。

## プロムナード

ちよつと上野の国立西洋美術館でルーベンス展が開催されていたためだ。集まったのは、触覚研究者、ダンサー、美術館のラーニング・キュレーター、教育学、編集者などなど。先天的に全盲の参加者も1人いた。とつきやすくするために、美術史において「バロック」の対極とされる「ルネサンス」と比較



しながら、それぞれの例をみながら議論していった。

一応美術史的に整理しておくとして、ルネサンスは16世紀半ばに最高潮に達した様式で、ミケランジェロに代表されるような、均整のとれた体と左右対称に近い画面構成が特徴。ひとことではいえない。対するバロックはよりドラマチック。16世紀末から17世紀にかけて広まり、渾然一体となった人々が暗